

機関番号：57601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520052

研究課題名（和文） 文献的手法と図像分析を併用したジャイナ教宇宙論の包括的研究

研究課題名（英文） A Comprehensive Study on Jaina Cosmology through Philological Method combined with Graphical Analysis.

研究代表者

藤永 伸 (FUJINAGA SHIN)

都城工業高等専門学校・一般科目文科・教授

研究者番号：70209071

研究成果の概要（和文）：ジャイナ教宇宙論が聖典期から 13 世紀まで緩やかに変化し、ヘーマチャンドラの時点で現在知られているような内容になったことを解明した。またジャイナ教に特有な「宇宙人間」の概念が聖典期以後に現れたが、その詳細な記述は後代まで行われなかったことも明らかにした。この間の発展に功績のあったのは、多数派ではなく少数派の思想家たちであることも成果の一部である。一方、図像としての宇宙は出現が遅く、その根源には文献が先行することが確定した。

研究成果の概要（英文）：In this research we found out that the cosmology in Jainism developed gradually from the canonical period through 13th century and its concept as we know now must have appeared in the time. We also found out that the idea of cosmic person, which is peculiar to the Jainism, is mentioned in the post canonical literature but its detail description is available only in the later texts. For the development of cosmology in Jainism the minor sect contributed more than the major one. Our research also shows that depiction of the cosmos comes out later period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：インド哲学

科研費の分科・細目：インド哲学・仏教学

キーワード：ジャイナ教、宇宙論、図像

1. 研究開始当初の背景

ジャイナ教は宇宙全体を直立した人間にたとえることで有名である。各種の文献にも図像が掲載されているのみならず、インドのジャイナ教寺院でもそのような図像が見られる。しかし、このような宇宙論がどのような歴史的展開を経て今日の形になったかに関しては先行する研究は皆無であった。また

図像が元にした文献はどのようなものかにもかかわらずしも明確ではなかった。更にジャイナ教宇宙論に関するサンスクリットおよびプラークリット原典の研究自体が、我が国はもとより世界的にもほとんど行われていなかった。

更にはジャイナ教の宇宙論と他のインド思想での宇宙論との関係も明確にされているとは言えなかった。

2. 研究の目的

(1) 関係文献の収集と解明

ジャイナ教文献の内、宇宙論を論じる文献を歴史的序列に従い収集し、その内容を分析し翻訳・用語の抽出などを行う。

(2) 歴史的変化の解明

上記(1)で述べた文献の解明を通じて、聖典期から中世及び近世にジャイナ教の宇宙論にどのような変化があるか、もしくは変化がないかを明らかにする。

(3) 図像分析による宇宙論の分析

写本等に現れた宇宙図を収集し、その構造を分析して、関連する文献との比較検討を行う。

(4) 他思想との比較

以上の成果を生かして、ヒンドゥー教および仏教の宇宙論と比較することにより、ジャイナ教宇宙論のインド思想における位置を明確にする。

3. 研究の方法

(1) 関係文献の収集と解明

まず聖典期の宇宙論関連の文献として、ジャイナ教の二大分派の内、白衣派に属する聖典の中から「生命・非生命経」を選び、本文校訂、用語の抽出などを行った。本文は殆ど問題がなかったが、マラヤギリによるサンスクリットの注釈をより正確に解読し、各種の引用の特定を行った。

また聖典期直後の宇宙論関連の文献として白衣派に属するジナパドラの『大集成』を選び、刊本を入手してマラヤギリのサンスクリット注を利用して解読した。その一方でインド国グジャラート州パタン市の写本庫所蔵の写本を入手して本文の校訂も行った。更に本文と注釈のグジャラーティー訳が存在することが明らかになったので、入手して理解をより明確にした。本文の理解を行うに際して、本文及び注釈を電子化し語句や文章の検索が簡便に行えるようにした。

これと並んで、ジャイナ教のもう一方の分派である空衣派に属する初期の宇宙論文献である「三界解説」を選んで、内容解明を行った。特に宇宙構造の根幹を扱った冒頭部分の解読を行った。

次にジャイナ教の両派から権威が認められている『諦義経』で宇宙論を扱う第3章及び第4章の解明を、両派を代表する注釈に従って行った。つまり白衣派ではいわゆる自注とシッダセーナガニの複注、空衣派ではプージュヤパーダの『全義成就』に従って本文を

理解した。

続いて13世紀の白衣派学僧ヘーマチャンドラの著作『ヨーガ論書』で宇宙論を扱う部分を自注によりながら解読した。またその内容をヘーマチャンドラの他の著作『63偉人伝』の宇宙論の箇所と比較し理解を確実にした。

文献研究の掉尾として16世紀のチャンドラスーリの著作『大集成』を解読し、後期ジャイナ教の宇宙論の理解に努めた。

(2) 歴史的変化の解明

上記の文献研究の過程でジャイナ教宇宙論の歴史的変化がどのようなものであったかを検討した。特に次の三点に注目して変遷の過程を辿った。

まず宇宙全体の構造である。つまり宇宙全体をいくつの部分に分けるか、全体を貫く部分を認めるかを各時代において着目した。

次に神々が住する上界の構造である。つまり、最上階の部分がどのように分節されるかに関して各時代の見解を比較した。

次に宇宙の各部分の大きさを示す単位の使用である。つまり宇宙の計測に関する記述が歴史的にどのように変化するかを検討した。

(3) 図像分析による宇宙論の分析

上記の文献的研究と平行して、具体的な図像によって示されたジャイナ教宇宙論の概略を検討した。主な研究対象は宇宙論文献を中心とする各種文献の写本に、挿絵として描かれた図像である。一方で現代のジャイナ教寺院等に備えられた図像も参考にした。これらの基本的に宇宙全体を一人の人間、つまり「世界人間」で表しているか否かである。また、主に我々人間が住する中界をどのような形によって表しているかを検討の対象とした。

(4) 他思想との比較

ジャイナ教はインド固有の思想の源泉であるから、全体として他のインド思想と共通する要素と独自の視点とを持っている。宇宙論においても同様な傾向があると予想される。本研究では、仏教の宇宙論とヒンドゥー教の宇宙論をジャイナ教と比較して相違点と類似点を探った。その手がかりとしては、直接原典を使用するよりも先行する各種の研究を用いた。仏教では原始仏典を参考にし、ヒンドゥー教ではプラーナの宇宙論を資料とした。

また両教の宇宙論の現れとして具体物によって表現された思想も比較した。図像を主なものとしたが、建築物として表された宇宙も資料として用いた。

4. 研究成果

(1) ジャイナ教宇宙論の歴史の変遷

ジャイナ教において宇宙に関する思想は基本的に変化していない。最古層に属する聖典文献では宇宙を三部分に分けている。これは本研究で扱った16世紀に属する『大集成』においても明確に述べられており、ジャイナ教宇宙論で一貫した思想であると言える。

しかし、細かく検討すると歴史の変遷と共に宇宙の形状や構造に関する見解も変化していることが分かる。

まず、宇宙の三部分に関する見解である。聖典期では単に宇宙を三分し、各々を具体的なものに喩えて説明するだけで、詳細は記述しない。

しかしジナパドラの『大集成』においては上界と下界を細区分し、各々に名称を与えている。この見解は『諦義経』でも基本的に同様であり、これに対する諸注釈でも受け継がれ後代のジャイナ教の見解として定着する。

つぎに三部分に共通する中央部についてである。この部分は聖典文献には述べられていない。また『大集成』には用語としては現れるが、詳細な記述は見られない。この部分が明確に取り上げられるのは『諦義経』に対する自注においてである。これ以後、業論との関連でこの部分に関する論議が継続的に行われる。また空衣派に属する文献『三界解説』では中央部分にかんして、詳細な説明はないものの明らかに三部分に共通するものとして言及されている。この事からして、ジャイナ教宇宙論の発展史において空衣派の影響力が大きかったことが推測されるが、同書の歴史的立場が必ずしも明確ではないために、確定できない。

また、上界の構造に関するジャイナ教徒の見解についても歴史的な変遷が見られる。上述のように最古層の文献では上界の細部は論じられていないが、『諦義経』以後は論述が詳細になる。特に「頸飾天」より上の部分は、それ以下の部分とは区別されると共に、人間の身体との比較で更に細分化され、一定数の神々が住する部分とされる。なおこれらの上界の区分には白衣派と空衣派とで多くの相違が見られる。

次に宇宙全体を直立した人間と表現する考え方である。このような見解は聖典はもとより、『諦義経』本文にも見られず、『諦義経』自注において初めて現れる。その後の文献では常に示されており、頸と顔に対応する上界の部分もより詳しく論じられることになる。上界に関するこのような記述は13世紀のヘーマチャンドラ時点ではそれ以前と変化がなく、それ以後と比較しても相違がないので、彼の時代には完成していたものと考えられる。

更にジャイナ教で宇宙の形状の記述に用

いられる単位にも若干の変遷を見ることが出来る。一般に「綱」が用いられ、宇宙全体の縦は14「綱」とされる。これは聖典期文献には見られず『諦義経』でも使用されていない。しかし、ヘーマチャンドラは「綱」で宇宙の諸部分を記述している。また16世紀になると「綱」の1/4が基本単位と導入される。

(2) 図像と文献との関連

ジャイナ教の図像に表象される宇宙の殆どが直立した人間である。この事実から図像の源泉となった文献は、聖典に属するものではなく、比較的後期の文献であることが分かる。また、宇宙図が描かれている写本自体が最古のものでも14世紀に属するものであり、描写も上界を初めとして詳細であることから、『諦義経』などではなく、ヘーマチャンドラの著作を参照にしたものであろうと結論づけることが出来る。

中界の表象としては、殆どが人間が腰の部分に持った円盤である。これも図像の源泉が比較的後期のものであることを肯定する一因である。

(3) インド思想におけるジャイナ教宇宙論

以上のようなジャイナ教宇宙論をヒンドゥー教や仏教と比較すると次の様な相違点と類似点がある。まず相違点として、ジャイナ教のみが中央部分を認めることである。また、上界の幾つかの部分もジャイナ教のみ見られ、仏教などでは知られていない。さらに宇宙の形状を一定の単位を使って記述することともジャイナ教のみが行うことである。

一方、共通点としては宇宙を三分することがあげられる。また仏教と共通することとして、地獄の各部分を三層に分ける点もある。

このような点を考慮するとジャイナ教はインドの宇宙論において中心的な役割を果たし、独特の見解を展開して来たことと結論づけることが可能である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

FUJINGA Shin. "Jinabhadra's Brhatsamgrahani and Malayagiri's commentary on it." in The Proceedings of the Jaina section of DOT. forthcoming.

[学会発表] (計3件)

1 FUJINAGA Shin. *Narratives in the Agama-Commentaries of Malayagiri*, Narrative in Jainism. at SOAS. 2011, March 18.

2 FUJINAGA Shin. *Cosmology in the*

Yogasāstra. International Seminar on
the *Yogasāstra*. Delhi 2010, December 19.

3 FUJINAGA Shin. Jinabhadra's

Brhatsaṃgrahaṇi and Malayagiri's
commentary on it. DOT. Marburg 2010,
September 20.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤永 伸 (FUJIAGA SHIN)

都城工業高等専門学校・一般科目文科・教
授

研究者番号 : 70209071